

特別記事：辰野登恵子が「画家になるまで」(つづき)

(裏面の続きです。)

大浦：そうなんですな。

利恵子：でも妹は途中でバスに酔うこと、度々でした。それで、好きな色を塗っちゃうと、先生が「この通りに描いていないから、もう一回描きなさい」って言うんです。でも登恵子は「これでいい」って言って聞かないの。

剛：真っ赤に塗る。

利恵子：私は早く帰りたいから、適当に直して(笑)。

一同：(笑)。

平出七菜：怒らなかつた？

利恵子：登恵子？うーん、怒ったかもしれないけれど、とにかく仕上がらないと帰れないから。

剛：最初からマティスみたいだった(笑)。

鑑木：子どもに好きに描かせるような絵画教室とは、ちょっと違う感じなんですな。辰野さんに、小学校5年のときにお絵描き教室で模写の課題があって、いくつかある中でマティスの《赤のハーモニー》(1908年)を選んだというお話がありました。これが初めて模写した絵だそうです。やっぱり色がすごく好きだったし、平面的な絵なので、きっと子どもでも難しくなく描けるだろうと思ったそうです(辰野登恵子「マティスと私(3)」読売新聞1981年4月9日夕刊、第9面など)。

七菜：(《赤のハーモニー》を見ながら)この絵がすごく好きだと言って、昔カードをプレゼントしてくれたことがあったわ。

高校時代

利恵子：お絵描き教室はもう、小学校高学年くらいで終わったかもしれないですね。小学校5、6年のときの美術クラブの保科先生が、絵の才能を見出して下さいました。「中学に行っても美術部に入ったらいいよ」と言われたそうです。

大浦：本当に子ども向けの教室だったんですね。

利恵子：中学、高校、大人の方も来ていたように思います。中学校は林先生。それで(諏訪)二葉高校に行ったら二木(六徳。高校時代の辰野の恩師。元イルフ画館館長)先生がいらして。

(中略)

鑑木：茅野(市美術館)のカatalogに高校の入学式で、お母様が二木先生に「この子は芸大を考えています。よろしく願います」と挨拶をされたエピソードがありました(太田智子「この土地に生まれて 辰野登恵子と諏訪」『在る表現 その文脈と諏訪 松澤寛・辰野登恵子・宮坂了作・根岸芳郎』茅野市美術館、2016年、pp.54-56)。高校の入学式で芸大に行こうと思っていたということは、その前から絵の道に進むことを考えていたと思いますが、そういったことについてご家族は聞きになっていましたか。

剛：漠然と。母親が芸大芸大って言っていたんじゃないかな、たぶん。音楽にしても美術にしても。

利恵子：『美術手帖』なんかを見たりね。

鑑木：中学校の頃ですか。

利恵子：高校のときは、取っていたけど、『美術手帖』があるかわからないけど。

剛：『セブンティーン』とか。英語の雑誌だけ。あれは高校かなあ。

大浦：『セブンティーン』は、アメリカのものを購読されていたんですか。

利恵子：そうなんです。たぶん中学くらい。

剛：取り寄せて。何ヶ月かかかってくるわけですよ。

七菜：すごいね。

利恵子：本屋さんからよく電話がかかってくるね。

大浦：本屋さんは、近くに取次ぎをしてくれる書店さんが。

利恵子：だから、お年玉をもらって本屋さんに買いに行くんです。『なかよし』とかそういう、漫画系のものを買ったり。

鑑木：じゃあなんとなく、中学生くらいのときから芸大を。

剛：いつ決意したとかいうのは、ちょっとわからないけれど。

七菜：私が知っているのは、高校に入ったときに朝、学校の授業が始まる前に行き、用務員さんが見かねて、寒いから暖房をつけてもらって描いていたと聞いたことがありますね。授業の前に行ってそこまで一所懸命やるというのは、もうそのときすでにその道を志していたんじゃないかなと。

剛：高校に入るときは本当に、母親の言った通り、芸大芸大って最初からたぶんあったと思う。

鑑木：じゃあなんとなくご家族の皆さんも、大学は芸大なんだろうなと。

剛：でも雲の上の大学だから、無理じゃないかなと思って私は見ていました(笑)。

利恵子：あの子のがんばりって、すごいんですよ。夜中まで煌々と電気をつけて、目が開かなくなるまでやるとか。父はあんまり心配しないんだけど、健康のことをよく心配していましたね。

大浦：お母様は全面的にバックアップされていたんですか。

利恵子：そうですね(笑)。

剛：よく画材を買いに行くのに母親と一緒に、「これは買わなくていいの?」とか。そういうところがあるんですよ、なんでも。教育費に関しては惜しまないところがありました。

鑑木：お母様は、心から芸大に行つて欲しいと思っていらっしたんですね。

藝大をめざして

大浦：その頃の美術コースの同級生のお話の中に、「週末、金曜日の放課後は私は家に帰るために中央線ののりに乗って、登恵子さんは東京に作品を見てもらうために行き、帰ってくると、そのときに教わった事や見た展示をいろいろと話して聞かせてくれるのがお決まりになっていた」というようなお話がありました(「土曜の授業が終わるとトコは登りの電車で東京へ。私は下りの電車で家路に…」美術コースの仲間だった浜育子さんの思い出。諏訪二葉高校同窓会会報『ふたば』第34号、2016年、特集「辰野登恵子」座談会、p.12。同じ座談会の記事内に、他にも類似の言及あり)。そうすると、長い休みの講習だけじゃなくて足繁く東京へ作品を見せに行ったり、展覧会を回ったりということがあったのかと想像していたんですけども。

利恵子：そうそう、ときどき来たかもしれない。岡谷のお菓子を持って来たりして、私も楽しみで待っていたから。そんなに回数は多くなくてね。

大浦：そうなんですな。

鑑木：ちょっと教えていただきましたかったのは、辰野さんのお話の中で受験勉強について「どばた」(すいどーばた美術学院)と「講習」とふたつの言い方が出てくるんです。「芸大の講習」というのは、芸大が受験生向けにそういう事をやっていたのかとも思ったんですけども、どばたの講習の事なんでしょうか。

剛：芸大の講習……ちょっとそこまでは(笑)。

鑑木：そうですね。とにかくどばたで受験勉強のために、夏期講習や冬期講習の間はずっとお姉さんと一緒に生活されていた。

剛：谷(新)さんと大石(一義。作家、グラフィックデザイナーで辰野の友人)さんが宇都宮で対談したとき(「辰野登恵子 愛でられた抽象 宇都宮美術館コレクション展 宇都宮美術館、2016年7月31日-9月4日)、セザンヌの《キュービットのある静物》の模写[挿図①]について書いてくれましたよね(谷新「辰野登恵子/天に魅入られた絵画—主義、概念を超えて「表現の起源」に降り立つ—」辰野登恵子 愛でられた抽象 宇都宮美術館、2016年、pp.6-19)。実は、(辰野の)セザンヌの模写ってコップが中心に置いてあるんですね。(宇都宮のカatalogを見ながら)ああ、それぞれ、それ、まだあるんですよ。後で見せますね。

大浦：ありがとうございます。



挿図① 《キュービットのある静物》
1967年 油彩、カンヴァス 個人蔵

剛：そういうのをやっていたんだな、と。

大浦：67年ですね。

剛：そういえば、家にそういうものを持って帰って来ていたような気がするな。あとは家で描いたりして。それは家で描いた絵でしょうからね。行ったり来たりしていたと思う。

鑑木：そうなんですな。坂本一道さんのお話で、どばたで登恵子さんが話題になっていたそうです。予備校で初めて皆と一緒にデッサンをする、皆上手いから萎縮しちゃう子も多いけれど……。

利恵子：そうなんですか。

剛：ああ、意識しちゃう。

鑑木：登恵子さんは常に堂々としていて、それが講師の間で話題になっていたそうです(笑)。坂本さんがおっしゃっていたと、二木先生からうかがいました。

剛：だいぶ目立っていたみたいですよ。

利恵子：室越(健美。画家)先生が、そのような話をしていましたね。

鑑木：「まるでプロみたいだ」と、予備校の先生同士で話していたそうです。先ほども、デッサンを結構やっていたということでしたけど、それは……。

利恵子：とにかく必死でやっていたので、たぶん自信をつけたんでしょうね。そのくらいの感じで、きっと東京に行ったんだと思いますね。登恵子らしいです。みんなの前では堂々と描こうと思っていたでしょうね。すごいですよ、とにかくバイタリティで。全てに対してそうよね。

画家の目

七菜：岡谷の家には行かれましたか。

大浦：近くまで行ったんですけども、真っ暗になってしまっ。

七菜：(信濃毎日新聞の挿絵のファイルを見ながら)これですね。満月の日にアトリエと一緒にいったときに、「あ、満月!七菜ちゃん、ちょっと来てみて」って言われて、「これを描いたんだよ」って、そのモデルとなった場所を教えてくださいました。[挿図②]

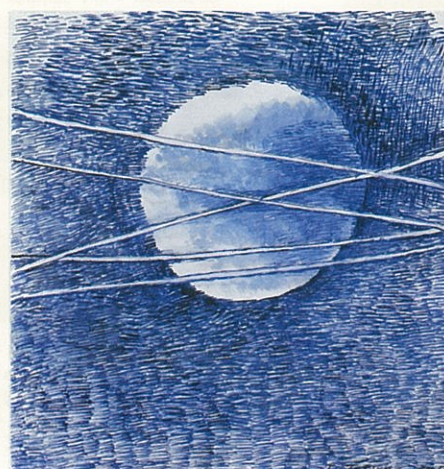
利恵子：アトリエと母屋が、ちょっと庭を通らなきゃいけないような感じでね。アトリエと言ったって、そんなに立派じゃないけど。そこで描いていたとき。

七菜：お庭なんですけれど、門に入ってすぐに大きな石があって、そこから天竜川沿いに見たときのアングルがそれ。

利恵子：あと、ナツメっていうのは黒いので……。 (ファイルから探しながら)黒くて実がいっぱいなるので、ひとつぶひとつぶが……。

加菜子：(ファイルを見ながら)これが岡谷の山だよな。

七菜：割れた器の話、聞きました? [挿図③]



挿図② 《F.T-40-2006》2006年 油彩、紙 個人蔵



挿図③ 《F.T-42-2006》2006年 鉛筆、紙 個人蔵

大浦：うかがってないです。

七菜：一緒に笠間に行ったときだったかな。私がオーケストラに入団してすぐ、趣味で何かやりたくなくて、夢だった美大の夜間に通って陶芸をやっていたんです。

大浦：そうなんですか。

七菜：トコちゃんもすごく喜んでくれたんです。まさか家族で美大に行く人がいるなんて思ってもみなかった。私は「でもトコちゃん、これは夜間だから」とか、「趣味だから」とか言って。そのとき、日本に帰ってきたら黨元に行つてみよう、叔母の提案で2003年の夏に笠間の伊藤公象先生の黨元に行つたんです。叔母が先生と知り合いということで、このような機会がいただけなんです。そのときに、そのアトリエで見た、割れたお茶碗がすごく印象に残ったみたいで。瀬戸には2005年に(辰野の陶芸への関心については、「水と土の芸術祭」2018年で公開された「水と土アーカイブ」内にある谷新のテキストに詳しい)。

大浦：そうなんですな。

鑑木：やっぱり割れた形とか、そういう何気ないところに目がいくんですね。

七菜：そうみたい。たぶん加菜ちゃんもそうだと思うけど、トコちゃんのおかげで一緒にいて視線や見るところ、見方が変わるっていうか。普通の物なんだけれど、叔母の目を通すと特別な物に変わって見えていたり。